

## 随筆『児女』に見られる朱自清と豊子愷の児女観

The Outlook on Children of Zhu Ziqing and Feng Zikai Seen in the “Ernü”

陳 洪傑、李 愛華

Hongjie Chen<sup>\*</sup>, Aihua Li<sup>\*\*</sup>

朱自清と豊子愷は中国の現代文学史上著名な作家として知られている。特に、現代随筆の分野において、二人はそれぞれの特色のある作風で文壇に名をはせ、数多くの名作を残した。それらの作品は、今なお、広く読まれている。興味深いのは、1928年10月10日付けの雑誌に二人がまったく同名の随筆『児女』を発表したことである。本稿では、この二つ『児女』を中心に、朱自清と豊子愷の一つの側面——父親としてありさま、および彼らの児女観、教育観について論じてみたい。

キーワード：随筆 朱自清 豊子愷 児女

### I. 二つの『児女』

現代中国の随筆を語る際、決して忘れてはならないのが、朱自清<sup>1)</sup>と豊子愷<sup>2)</sup>である。共に中国現代の代表的な随筆家である朱自清と豊子愷は、いずれもその独特の風格が高く評価され、中国文学史上に確固たる地位を確立させている。彼らの随筆は、五四運動以降、現在に至るまで、多くの作品に少なからぬ影響を与え続けている。二人はいずれも著名な随筆家であると同時に、たいへん気の合う親友でもあった。彼らがかつて浙江省上虞白馬湖の春輝中学<sup>3)</sup>で共に仕事をしたり、生活したりした仲であった。それだけではない。同時代を生きたこの二人の作家には、他にも様々な共通点が見られる。例えば、彼らの原籍は共に浙江省であり<sup>4)</sup>、いずれも読書人の家庭に生まれた。同じ年に生まれ、共に子宝に恵まれ、ほぼ同時期に有名人になった。中でも最も興味深いのは、1928年10月10日付けの『小説月報』十九巻第十号に、二人のまったく同名の随筆『児女』が発表されたことだった。朱自清の随筆『児女』<sup>5)</sup>は、篇末に「六、二十四日写畢於北京清華園 朱自清」と書かれていることからわかるように、1928年6月に書き上げられた。豊子愷の随筆『児女』<sup>6)</sup>は、もともと期日の記載はなかったのだが、『小説月報』に掲載される際、「戊辰年(1928年) 韦駄聖誕作於石門湾」と署名された。月日まではわからないが、こちらも1928年に書かれたものである。この二つの同名の随筆は、いずれも朱自清と豊子愷が上虞白馬湖を離れた後に書かれたものであった。

\* 流通科学大学 非常勤講師、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

\*\*神戸大学 非常勤講師、〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

(2009年9月9日受理)

©2010 UMDS Research Association

朱自清、豊子愷の『児女』からは、子供に対する父親の深い愛情だけでなく、彼らの児女観および教育観—我が子に対するものから、世間一般の子供たちに対するものまで—をも読みとることができる。

## II. 『児女』発表の前夜

二人の『児女』が発表されるまで経緯を詳しく見てみよう。親友である俞平伯<sup>7)</sup>の推薦を受けた朱自清は、五年あまりの安定しなかった生活に終止符を打ち、1925年8月に白馬湖を離れ、一人清華学校大学部へ赴任した。妻子はひとまず白馬湖に残った。その一年五ヶ月後の1927年1月、朱自清は家族を迎えに北京から白馬湖へ戻った。ただ、大学内には住居が確保できず、子供たち全員を連れて行くことはできなかった。そこで長男の邁先と次女の逸先を父母に託し、揚州へ連れていってもらうことにした。朱自清は妻と長女の采芷、次男の潤生を連れて海路で北上し、清華園の西庭に住むことになった。北京で安定した仕事を手に入れた朱自清だったが、長年憧れ続けてきた「一家団欒」の願いを実現することはできなかった。1928年1月には三女の效武、すなわち『児女』に登場する「阿毛」が北京で生まれた。随筆『児女』が書かれたのは、その年の6月、つまり「阿毛」の生後五ヶ月ごろのことであった。

一方の豊子愷は、春輝中学校での騒動で、朱自清より半年早い1924年11月の下旬、春輝中学校の職を辞し、家族全員で上海へ移り住んだ。朱自清の安定した生活とは異なり、豊子愷は白馬湖を離れてから随筆『児女』を完成するまでの数年間、つまり1925年から1928年の三年間、激動の時を過ごしていた。上海へやってきた豊子愷は、まず上海師範学校で教鞭を執りながら、春輝中学校時代の同僚だった匡互生らと立達学園を創設することとなる。1925年5月、小西門黄家關路にあった上海師範学校の校舎を借りて立達中学校を設立、やがて「立達学会」が成立する。この年の夏、立達中学校は上海江湾に新しく建設された校舎に移され、「立達学園」と改名される。秋、豊子愷は江湾の安楽里に引越したが、翌26年の秋、永義里に立達学園の教職員宿舎が完成すると、豊子愷一家もここに転居した。この年の上半期には、呉夢非の建てた上海専科師範学校と、周勤豪が設立した上海東方芸術専科学校とが合併し、「上海芸術大学」となった。豊子愷はそのまま教職を兼任した。秋になると、呉夢非と周勤豪との間に亀裂が生じ、呉夢非は上海芸術大学を辞めて白馬湖の春輝中学校へ赴任、周勤豪は上海芸術大学を天通庵江湾路へ移転させた。こうしたことがきっかけとなって、豊子愷は上海芸術大学の職を辞した。この年の8月、行脚中の弘一法師<sup>8)</sup>が、上海江湾永義里の豊子愷の自宅に宿泊した。豊子愷が法師に「家名」の命名を依頼したところ、「縁縁堂」という名を授けられた。27年7月、次男の元草がこの縁縁堂で生まれた。この年の秋、弘一法師の三度目の訪問を受けた際、豊子愷はこの縁縁堂で式を執り行い、弘一法師に従って佛門に帰依した。「嬰行」との法号を授かった。9月26日(旧暦)、豊子愷30歳の誕生日のことである。翌28年になると、立達学園西洋画科の経営が悪化し、西洋画科の廃止を余儀

なくされた。豊子愷は、西湖芸術専科学校の校長林鳳眠に手紙を書き、立達学園西洋画科の教員および数十人の学生の受け入れを要請した。林鳳眠は全員の受け入れを承諾してくれただけでなく、豊子愷自身をも講師として招請したが、豊子愷は婉曲的に辞退した。それからというもの、豊子愷は縁縁堂で執筆活動に専念した。『児女』が書かれたのはその年のことだった。以上が、白馬湖を離れたあとの朱自清と豊子愷の状況である。

では、朱自清と豊子愷、二人の『児女』が発表された1928年当時、彼らの子供たちはどういう状況だったのだろうか。

1928年、30歳の朱自清には五人の子供がいた。『児女』の冒頭でも「私も今では五人の子供の父親になった」と言っている。『児女』の中の「阿九」、つまり長男の邁先は1918年9月生まれの10歳、朱自清が21歳の時に揚州で生まれた。『児女』の中の「阿菜」、つまり長女の采芷は1920年5月生まれの8歳、朱自清が23歳の時に揚州で生まれた。次女の逸先は6歳で、『児女』の中の「転児」、1922年11月に温州で生まれた。次男の潤生は3歳、『児女』の中の「潤児」、25年5月に白馬湖で生まれた。そして三女の效武が『児女』の中の「阿毛」、1928年1月に北平で生まれた。彼女は『児女』が発表された当時、まだ1歳にも満たない乳飲み子だった。

1928年、同じく30歳だった豊子愷にも五人の子供がいた。長女の陳宝が1920年8月生まれの9歳で、『児女』の中の「阿宝」、豊子愷が23歳の時に生まれた。次女の宛音が1921年10月生まれの8歳。三女の寧馨<sup>9)</sup>が7歳で、『児女』の中の「軟軟」、1922年5月に生まれた。長男の華瞻が1924年3月生まれの5歳で、『児女』の中の「瞻瞻」、四男の元草は27年7月に生まれた。1928年といえば、豊子愷が教職から身を引いて、ほとんどの時間を自宅での著作と翻訳に費やしていた頃である。随筆『児女』が発表されたのは、ちょうどそのころのことであった。

### Ⅲ. 『児女』に見る二人の父親像

朱自清、豊子愷の『児女』には、彼らの子供に対する感情がそのままに描き出されている。字間、行間、あらゆるところに、子供に対する親の深い愛が満ちあふれていて、読む者の心に訴えかけてくる。しかし、二人の教育観、愛情表現はそれぞれ異なっていた。

朱自清の『児女』からは、若いころの朱自清にとって、子供は幸せや喜びよりも、苦悩をもたらす存在であったということがうかがえる。朱自清は騒々しい子供たちにいつも頭を悩まされていた。

每天午饭和晚饭,就如两次潮水一般。先是孩子们你来他去地在厨房与饭间里查看,一面催我或妻发‘开饭’的命令。急促繁碎的脚步,夹着笑和嚷,一阵阵袭来,直到命令发出为止。他们一递一个地跑着喊着,将命令传给厨房里用人;便立刻抢着回来搬凳子。于是这个说,‘我坐这儿!’那个说,大哥不让我!大哥却说,‘小妹打我!’(中略)

吃饭而外，他们的大事便是游戏。游戏时，大的有大主意，小的有小主意，各自坚持不下，于是争执起来；或者大的欺负了小的，或者小的竟欺负了大的，被欺负的哭着嚷着（中略）最为难的，是争夺玩具的时候，这一个的与那一个的是同样的东西，却偏要那一个的；而那一个便偏不答应。（朱自清【兒女】 p 10）

毎日昼と夜の食事時は、まるでうしおのような騒ぎだった。子供たちはそれぞれ台所と居間の間を行ったり来たりしながら、ご飯の出来ぐあいを見たり、まだかまだかと家内に催促したりした。せわしげな足音、笑い声やわめき声がひとしきり続き、「ご飯ですよ」の指示が聞こえるまで止まなかった。彼らは順繰りにその指示を台所のお手伝いさんに伝えると、先を争って椅子を運んだ。一人が「僕がここ」と言うと、別の子が「兄ちゃんが譲ってくれない！」と言う。すると兄ちゃんは「妹が僕をたたいた」と反論する（中略）。

食事以外に、彼らにとって重大なのは遊びである。遊ぶ時も、大きい子には大きい子の、小さい子には小さい子の、それぞれ各自の考えがあり、あくまでそれを主張して譲らなかった。ある時は上の子が下の子をいじめ、下の子が上の子をいじめることもあった。いじめられた方は泣いたりわめいたりした。（中略）一番大変なのは、おもちゃの奪い合いだった。こっちもあっちも全く同じものを持っているのに、なぜか相手のものをほしがった。しかし相手は絶対に手放そうとしない。

こうした行動は、子供にとっては当たり前の、ごく自然なものであったのだが、朱自清にはそれが理解できなかった。そのため、荒々しい態度に出してしまうこともあった。

我给他们调解，说好话。但是他们有时候很固执，我有时候也不耐烦，这便用着斥责了；斥责还不行，不由自主地，我的沉重的手掌便到他们身上了。（朱自清【兒女】 p 10）

私は彼らを仲裁したり、なだめすかしたりした。しかし時として彼らはほんとうに言うことを聞かなかった。私は我慢できず、厳しく責めることもあった。それでも聞かない時は、つい私の重い手が彼らの体を打つのがあった。

これらのできごとは、朱自清一家が白馬湖にいた時のことだった。当時朱自清には四人の子供がいた。続けて朱自清は、杭州と台州に住んでいた頃に阿九と阿菜に加えた「暴行」について、いたたまれない思いでこう語っている。

阿九才两岁半的样子,我们住在杭州的学校里,不知怎地,这孩子特别爱哭,又特别怕生人。一不见了母亲,或来了客,就哇哇地哭起来了。学校里住着许多人,我不能让他扰着他们,而客人也总是常有的;我懊恼极了,有一回,特地骗出了妻,关了门,将他按在地下打了一顿。(中略)阿菜在台州,那是更小了;才过了周岁,还不会走路。也是为了缠着母亲的缘故吧,我将她紧紧地按在墙角里,直哭喊了三四分钟;因此生了好几天病。(朱自清『児女』 p12)

当時、阿九はまだ二歳半くらいで、私たちは杭州の学校に住んでいた。どういうわけか、この子はよく泣き、はげしく人見知りをした。母親の姿が見えなかったり、あるいは客が来たりすると、すぐ泣き出してしまう。学校には多くの人住んでいるので、私は彼らに迷惑をかけるのではないかと気をもんだ。しかもうちにはしょっちゅう客が出入りしたものだ。思い悩んだ私は、ある日、妻をだまして外出させ、ドアを閉めると、阿九を床に押さえつけてひとしきり叩いた。(中略)台州にいた頃の阿菜はそれよりもっと小さかった。満一歳になったばかりで、まだうまく歩けなかった。やはり母親にまわりついていただけだ。だろうか、私はあの子を壁の隅に押し付けて、三、四分間泣き叫ばせた。それが原因で、阿菜は何日か病気になってしまった。

朱自清にとって、子供の騒ぎは、ある種の負担であり試練でもあった。彼は精神的にかなり参っていた。『児女』の中にはこう書かれている。

我曾给圣陶写信,说孩子的折磨,实在无可奈何;有时竟觉得还是自杀的好。这虽是气愤的话,但这样的心情,却也有过的。(朱自清『児女』 p12)

私はかつて聖陶宛てた手紙の中にこう書いたことがある。子供による苦悩は本当にどうしようもなく、自殺したほうがましなのではないかとすら思うこともあった、と。もちろんそれは腹が立った時の話なのだが、実際にそのような気持ちがなかったわけではない。

道理からいえば、朱自清のやり方は決して行きすぎたものではなかった。当時の中国社会の状況から言うと、親が子供に叱責や体罰を加えることはごく当たり前のことだったのだ。朱自清自身も言っているように、そのやり方は、「普通の父親と変わらない」ものだった。

子供の騒ぎは、豊子愷の家でもよくあることだった。子供の「騒動」と「破壊」に対して、豊子愷の対応はどのようなものだったのだろうか。彼のやり方は、朱自清とはまるで異なっていた。豊子愷は『児女』の中でこう言っている。

我在平屋的南窗下暂设一张小桌子,上面按照一定的秩序而布置着稿纸、篋、笔砚、墨水瓶、浆糊瓶、时表和茶盘等,不喜欢别人来任意移动,这是我独居时的惯癖。(中略)然而孩子们一爬到我的案上,就搞乱我的秩序,破坏我桌上的构图,毁损我的器物。他们拿起自来水笔来一挥,洒了一桌子又一衣襟的墨水点;又把笔尖蘸在浆糊瓶里。他们用劲拔开毛笔的铜笔套,手背撞翻茶壶,壶盖打碎在地板上。(豊子愷『儿女』 p 38)

私は平屋の南側の窓ぎわに、小さな机をおいた。そこに原稿用紙、便箋、筆、硯、インク瓶、のり瓶、時計、茶器などをきちんと並べておいた。それらのものを勝手に動かされるのはいやだった。それは私が一人暮らしをしていた時からの癖だった。(中略)しかし子供たちは、机にはい上がると、私の秩序を乱し、机上の構図を破壊し、物を壊した。彼らは万年筆を振って、机や服にインクを飛び散らせ、筆先をのり瓶に挿した。万年筆の銅製のキャップを抜いたり、手の甲を急須にぶつけて蓋を割ったりした。

このように秩序が乱され、めちゃくちゃにされることに対し、豊子愷はひどく腹を立てた。しかし彼は自分の怒りを抑え、冷静な態度をとった。彼はこう語っている。

这在当时实在使我不耐烦,我不免哼喝他们,夺他们手里的东西,甚至批他们的小颊。然而我立刻后悔:哼喝之后立刻继之以笑,夺了之后立刻加倍奉还,批颊的手在中途软却,终于变批为抚。(豊子愷『儿女』 p 38)

私は我慢し切れなかった。彼らを叱りつけ、握っている物を取り上げ、頬を叩いたりもした。しかしすぐに後悔した。叱った後、すぐに笑って、彼らの頭をなでるようになったのだ。

豊子愷のこうした寛容な態度は、『儿女』だけでなく、『華瞻の日記』の中にも表れている。<sup>10)</sup> かつて朱自清が「仁者の言だ」<sup>11)</sup>と感心したほどだ。

子供への対応という点において二人を比べてみると、朱自清の方は確かにいささか「乱暴」だと言えよう。しかしそこには朱自清の、若さ、気の短さ、忍耐力の不足、といった要素以外にも、無視することのできない要素、つまり経済的な要素が大きく関係していたのではないだろうか。結婚以来、彼は経済的に長らく厳しい状況に置かれていた。そのことが朱自清の「乱暴さ」を生み出した大きな要因のひとつであることを、我々は見逃してはなるまい。豊子愷の経済状況とはいえば、決して豊かとは言えないまでも、朱自清に比べれば、まだゆとりがあるものだったと思われる。豊子愷は教師としての収入以外に、原稿料収入も得ていた。一方、朱自清の方は、教師としての薄給のみで、原稿料など当てにもならなかった。その少ない給料でさえ、時にはもらえ

ないこともあった。前述した白馬湖、杭州、台州の三つの時期は、朱自清にとって、経済的に最も不安定な時期だった。毎日東奔西走したにもかかわらず、安定した収入を得ることはできなかった。さすがに次の食事を心配するほどではなかったが、生活必需品をそろえるのもやっとだった。こうした状況を考え合わせると、朱自清がいらだつのも無理はない。

#### IV. 『児女』に見る二人の児女観

しかしそんな朱自清でも、子供たちに「喜び」や「幸せ」を感じなかったわけではない。彼は『児女』の中でこう述べている。「指であごをさわったり、変な顔をしてみせたりすると、歯のない口をあけて、けらけら笑い出し、まるで咲いている花のよう」だった阿毛。三歳になったばかりで、「ろくに話せない」「足が短くて、よちよち歩いた」潤児。そして「もう七歳になって小学生にあがり、食事時になると、同級生やその両親のことをぺちやくちゃ」話したり、あれやこれやと質問ばかりする阿菜。この頃の朱自清にとって、子供たちは「可愛く」「愛おしい」存在だった。これは朱自清が清華園に来て三年目のことだった。生活はそれほど豊かではなかったが、仕事が安定し、生活も以前ほど不安定ではなくなっていた。環境が変わったことで、気持ちにも変化が現れたのだ。こうした精神状態にあって、彼はようやく余裕をもって子供たちの言行を観察し、子供たちの「花のような」「不器用な」「相手が聞いていようがいまいが息を弾ませながらおしゃべりをする」姿に目を向けることができるようになった。白馬湖、杭州、台州にいた頃には、こうした心境にはなれなかった。北京に来てからも、子供たちは相変わらず「いつもわめき騒いだり、泣いたり」「追いかけたり、喘いたり、笑ったりしていた」が、こうした子供たちの騒ぎは、朱自清にとってもはや悩みの種ではなくなっていた。「子犬のように」可愛いものになっていたのだ。

豊子愷の方はどうだったのだろうか。豊子愷の子供に対する態度には、朱自清ほどの大きな変化は見られない。彼は終始子供たちをいつくしみ、平穏な心理状態を持ち続けた。穏やかで優しい親として、また信頼できる友人として、子供たちと付き合っていた。子供好きな豊子愷にとって、子供たちと一緒に生活することは、喜びだった。子供のいない生活は、彼にとっては不自然なものだった。豊子愷は『児女』の中でこう言っている。「あの四ヶ月間のゆったりした、静かな一人の生活は、懐かしく、また感謝すべきものだった。」と。豊子愷が1928年に一切の教職から退いて、上海（永義湾）の自宅で執筆活動に専念していた時のことだ。その四ヶ月前、豊子愷は、

犹似押送囚犯，突然地把小燕子似的一群儿女从上海的公寓中拖出，载上火车，送回乡间，关进低小的平屋中。自己仍回到上海的租借中，独居了四个月。（豊子愷『児女』 p 36）

まるで犯人を護送するかのように、燕の子のような我が子たちを上海のアパートから引っ張り出して列車に寄せ、田舎へ送り返し、小さな平屋に押し込んだ。それから自分一人で上海のアパートに戻り、四ヶ月間一人で生活した。

子供たちの騒ぎから解放されたことで、彼は確かに著作に専念することができた。しかし、その後一時的に故郷に帰り、子供たちに囲まれていた時、彼は「思わず悲しく」なった。そしてふと悟ったのだ。「黙って座り、ひとり考え、研鑽を積み、探し求め、イメージをふくらませ、人と交わった」一人の暮らしは、子どもたちとの「無邪気で、健全で、活発な」生活に比べると、まるで「変態的で、病的で、不健全な」生活だったと。

豊子愷の生活に、子供は不可欠だった。子供の生活、子供の世界は、豊子愷自身の世界の重要な一部になっていた。子供の世界は豊子愷にとって、創作の源の一つでもあった。彼は子供を羨み、愛でるばかりでなく、子供の立場に立って子供を理解し、彼らの世界に深く入り込むことができた。それは豊子愷自身が、子供と通じ合う「赤子の心」を持っていたからであろう。だからこそ彼は、子供の、一般の人間から見れば「ごく普通の」振る舞いの中から「普通でない」ものを見つけ出すことができたのだ。

上海で四ヶ月間一人暮らしをした豊子愷は、夏の盛りに田舎へ帰った。その翌日の夕方、彼は「四人の子供たち—九歳の阿宝、七歳の軟軟、五歳の瞻瞻、三歳の阿韋—と一緒に、庭のエンジュの木の下に座って西瓜を食べた。」子供が西瓜を食べるというごくありふれた行為の中から、豊子愷は「音楽」と「詩」を聞き、「散文」と「数学」を見つけた。

最初是三岁的孩子的音乐的表现,他满足之余,笑嘻嘻摇摆着身子,口中一面嚼西瓜,一面发出象花猫时候的“ngam ngam”的声音来。这音乐的表现立刻唤起了五岁的瞻瞻的共鸣,他接着发表他的诗:“瞻瞻吃西瓜,宝姐姐吃西瓜,软软吃西瓜,阿韦吃西瓜。”这诗的表现又立刻引起了七岁与九岁的孩子的散文的、数学的兴味:他们立刻把瞻瞻的诗句的意义归纳起来,报告其结果:“四个人吃四块西瓜。”(豊子愷【儿女】 p 37)

最初は三歳の子供の音楽の表現だった。彼は満足のあまり、にこにこ笑いながら体を揺すって、西瓜を食べながら、猫のように「ニャーニャー」と声を発した。この音楽のような表現につられて、五歳の瞻瞻が詩を発表した。「瞻瞻ちゃんが西瓜を食べる。宝ねえちゃんが西瓜を食べる。軟軟ちゃんが西瓜を食べる。韋ちゃんが西瓜を食べる。」と。するとこの詩的表現につられて、今度は七歳と九歳の子供が、散文的、数学的な興味を示した。彼らは瞻瞻の詩の意味をまとめてこう言った。「四人が四切れの西瓜を食べる。」と。



豊子愷は喜んで子供たちの表現を評価し、その空間を共有した一員として自らも子供たちの活動に参加した。

看他们的态度,全部精神没入在吃西瓜的一事中,其明慧的心眼,比大人们所见的完全的多。天地间最健全心眼,只是孩子们的所有物,世间事物的真相,只有孩子们能最明确、最完全地见到。(豊子愷『児女』 p 38)

彼らの態度、そして彼らが全身全霊を以て西瓜を食べることから判断するに、彼らの聡明な心と目は、大人たちが見ているものよりずっと多くのものを見ていることがわかる。この世界で最も健全な心と目は、子供たちだけに備わっている。物事の真相は、子供たちだけが、最も明確に、最も完全に見つけだすことができるのだ。

## V. 『児女』に見る二人の教育観

中年を迎えた朱自清は、若い頃の自分がとった子供たちへの態度に、やましさを後悔を感じていた。彼は『児女』の中でこう述べている。

近来差不多是中年的人了,才渐渐觉得自己的残酷;想着孩子们受过的体罚和斥责,始终不能辩解——像抚摸着旧创痕那样,我的心酸溜溜的。(中略)觉得从前真是一个‘不成才的父亲’。只一味地责备孩子,让他们代我们负起责任,却未免是可耻的残酷了。(朱自清『児女』 p 10)

近頃、中年と呼ばれる歳になってようやく自分の残酷さに気がついた。子供たちに与えた体罰や叱責を思うと、弁解もできない。一古傷に触れられるかのように、私の胸はずきずきと痛む。(中略)あの頃は本当にだめな父親だった思う。(中略)ひたすら子供たちを責め、彼らに責任をなすりつけていたなんて、恥ずべき、残酷なことだと言うしかない。

彼は若かりし頃の振る舞いを反省すると同時に、「自分の責任に気づくように」なった。自分は「今後よい父親になるべきだ」と思うようになった。そのためにはどうすればよいのか。彼はこう言っている。

我想,第一该将孩子们团聚起来,其次便该给他们些力量。应该好好地教育他们,莫将他们荒废,(中略)让他们渐渐知道怎样去做人才行。(朱自清『児女』 p 14)

まずは子供たちを団結させ、それから彼らに力を貸してやるべきだ。きちんと彼らを教育

し、ほったらかしにしてはならない。(中略) そうして、どうやったら正しい人間になれるのかを知っていてももらわなくてはならない。

朱自清は、かつて親友の葉聖陶と子女の教育問題を話し合ったことについて、『児女』の中で触れている。どのように子供を助け、どのように子供に対して責任を負うべきなのかという点において、葉聖陶と朱自清は同じような考え方を持っていた。葉聖陶はこう言っている。

儿女的生长只有在环境的限制之内,凭他们自己的心思能力去应付一切。这里所谓环境,包括他们所遭遇的事和人物,一饮一啄,一猫一狗,父母教师,街市田野,都在里头。(中略) 做父母的真欲帮助儿女,仅有一途,就是诱导他们,让他们锻炼这种心思能力。<sup>12)</sup>

子供たちは制限された環境の中でしか成長しない。彼らは自分の考え、自分の能力ですべての事に対処する。ここでいう環境とは、彼らの出会う出来事、人物、一回一回の食事、猫、犬、父母、教師、市街、田野などすべてを含むものである。(中略) 親として本当に子供たちを助けたいと思うならば、その方法は一つしかない。彼らを教え導き、そうした考えや能力を鍛えてあげることだ。

すなわち、子供が環境に適応しきれず、路頭に迷うことのないように、親としてまず子供たちを環境に適応させ、そうした環境に適応する能力を養ってあげなくてはならない。大きく言えばそういうことになるが、具体的な方法として、朱自清はこう言っている。「目下できることは、彼らの基本的な力—彼らの志と見識—を養ってやることだ。」

子女への関心という問題について、豊子愷はどのような考えを持っていたのだろうか。彼は『児女』の中でこう言っている。

朋友说我关心儿女。我对于儿女的确关心,在独居中更常有悬念的时候。但我自以为这关心与悬念中,除了本能以外,似乎尚有一种更强的加味。(中略) 我对于儿女的关心与悬念中,有一部分是对于孩子们——普天下的孩子们——的关心与悬念。(豊子愷『児女』 p 38)

友人は、私が子供たちに関心があると言う。確かに私は子供たちのことを気にかけている。特に一人で暮らしていたあの頃は、とりわけ子供たちのことを心配していた。ただ、こうした子供たちへの関心や心配には、本能的なものほかに、もっと強い意味があるように思われる。(中略) 子供たちへの関心、心配の一部は、子供たち—世の中の子供たち—への関心と心配である。

豊子愷の関心は、小さく言えば自分の子供たちに向けられたものだったが、大きく言えば、この世の中すべての子供たちに向けられたものだった。豊子愷は『児女』の結末でこう言っている。

近来我的心为四事所占据了：天上的神明与星辰，人间的艺术与儿童。这小燕子似的一群儿女，是在人世间与我因缘最深的儿童，他们在我心中占有与神明、星辰、艺术同等的地位。（豊子愷『児女』 p 39）

近ごろ私の心は四つのことで占められている。天上の神と星、世の中の芸術と子供である。まるで燕の子のような子供たちは、この世の中で、私と最も縁の深い子供たちだ。私の中で、彼らは神や星、芸術と同じ地位を占めている。

朱自清と豊子愷の作品からは、彼らの偉大な人格が浮かび上がってくる。若い頃の朱自清は子供に悩まされたこともあった。子供に対して「乱暴」に振る舞ったこともあった。しかしそれでも、豊子愷と同様、尊敬されるべき父親の威厳を失うことはなかった。

#### 引用文献、注

- 1) 朱自清（1898—1948） 現代随筆家、詩人。字佩弦、江蘇揚州の人。かつて清華大学、西南聯合大学などで、教鞭をとっていた。彼の詩や随筆の中に、暗黒な現実への不満と明るい未来の期待をうたったものもある。詩集「踪跡」、随筆集「背影」、「欧遊雜記」。
- 2) 豊子愷（1898—1975） 現代画家、随筆家、美術音楽教育家。浙江桐郷の人。かつて李叔同について、絵画、音楽を学んだ。1921年に来日、帰国後上海、浙江などで美術と音楽の教育に従事。絵画では竹久夢二の影響を受ける。新中国建国後、上海画院院長などを歴任。画集「子愷漫画」、随筆集「緑縁堂随筆」、翻訳作品「源氏物語」など。
- 3) 春暉中学 浙江上虞の白馬湖に位置する。1922年に成立し、当時新式の学校として広く知られていた。豊子愷が1922—1924年図絵、音楽を、朱自清が1924—1925年、国文を教えていた。
- 4) 朱自清は江蘇東海県生まれ、本籍は浙江紹興。幼いころ、揚州へ引越し、そこで育ったため、自称「揚州の人」。豊子愷は浙江石門県生まれ（今の浙江省桐郷市石門鎮）。
- 5) 朱自清の文章は、文化図書公司『朱自清全集』民国十五年（1926）年に拠る。p 10—15。
- 6) 豊子愷の文章は、人民文学出版社『緑縁堂随筆』1957年に拠る。p 36—39。
- 7) 俞平伯（1900—1990） 詩人、作家、古典文学研究家。本名俞銘衡、浙江の人。詩集「冬夜」、著「雜拌児」、「紅樓夢研究」など。
- 8) 李叔同（1880—1942） 早期新劇活動家、芸術教育家。浙江平湖の人。書画、篆刻に長じる。1905—1910年、東京で西洋絵画と音楽を学び、春柳社を創立。帰国後、浙江兩級師範学校、南京高等師範学校などで、絵画、音楽を教えていた。1918年、杭州の虎跑寺で出家、法名演音、号弘一。その後、戒律の研究に励んだ。豊子愷が浙江兩級師範学校在学中に音楽と絵画の担任としていた。
- 9) 軟軟は、豊子愷の実子ではなく、彼の三番目の姉の子供。幼いころから一緒に暮らし、自分の子として

いる。

- 10) 豊子愷、「華瞻の日記」『縁縁堂隨筆』人民文学出版社 1957。P14-18。
- 11) 朱自清、「児女」『朱自清全集』。P14。
- 12) 葉聖陶、「父親になった」『父親の責任』京華出版社 2006。P68。

#### 参考文献

- 1) 李広田「朱自清先生伝略」『朱自清選集』開明書店 1951
- 2) 季鎮淮「朱自清先生年譜」『朱自清文集』開明書店 1953
- 3) 陳孝全「論朱自清の散文創作」『上海師範大学学報』1979年4期
- 4) 陳孝全・劉泰隆『朱自清作品欣賞』広西人民出版社 1981.9
- 5) 楊昌江『朱自清の散文芸術』北京出版社 1983.3
- 6) 郭良夫編「朱自清の治学と為人」—『完美的人格』生活・読書・新知三聯書店 1987.7
- 7) 明川「隨筆から豊子愷の児童相を見て」『波紋』1巻5期 1974.8
- 8) 豊華瞻「私の父豊子愷の散文」『文彙報』1981.1.20
- 9) 陳星「豊子愷散文の芸術特色」『杭州師範学報（社科版）』1983年1期
- 10) 李愛華・陳洪傑「豊子愷と十ヶ月の日本留学」『龍谷大学国際センター研究年報』第17号 2008
- 11) 豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集 文学卷 1-3』浙江省文芸出版社・浙江省教育出版社 1992
- 12) 豊一吟編『豊子愷伝』浙江省人民出版社 1983
- 13) 盛興軍編『豊子愷年譜』青島出版社 2005